

## 大祭司なるイエス

2007. 11. 13 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

### 引用聖句

ヘブル人への手紙 4章14節から16節

さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

今日は、いつも生きておられ私たちのことを考えておられるイエス様について、考えたいと思います。

イエス様は、「大祭司」とも呼ばれておられるお方です。只今読んでいただきました4章14節『さて、私たちのためには、偉大な大祭司である神の子イエスがおられる』。だから結論は、OK。どのような悩み苦しみがあっても、喜ぶことができるということなのです。

今日もいつも言うように勉強会ではありませんから、「分かれよう」と思っても無理です。つまり「よろこびの集い」だということです。どうして「よろこびの集い」であるかといいますと、イエス様は、『ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。(マタイ伝18:20)』とおっしゃいました。目には見えませんが、イエス様はま近においでです。

みことばによりますと、私たちはイエス様を見る瞬間、必ず変えられます。イエス様と同じ姿に変えられるようになるのです。

イエス様の呼びかけは、『あなたの口を大きくあけよ。わたしがそれを満たそう。(詩篇81:10)』です。

私たちにとって大切なことは、「聞く耳を持つ」ことです。「主よ。語ってください。しもべは聞いております」と。イエス様は、悩んでいる人々を探し求めておられます。なぜなら、そのような人々だけが「聞く耳」を持つ者であり、そのような人々だけが「助けを求めらる者」であり、主の恵みにあずかるようになるからです。

14節『私たちのためには、…偉大な大祭司である神の子イエスがおられる』。

大祭司のつとめは、二つあります。

\*一つは、聖なる神と人間との仲保者です。

このつとめは、イエス様の死によって成就されました。すなわち債務は支払われ、罪は赦され、悪魔の支配から解放されたのです。

\*さらに、大祭司のもう一つのつとめは、とりなしの祈りをする事です。

この奉仕は、こんにちも私たちのためにイエス様がなさっておられます。イエス様は、大いなる愛をもって人間一人一人のことを思っていてくださるのです。人間には考えられないことです。けれども、間違いなくそうなのです。

多くの人々は孤独になって、「無視されている。誰も自分のことを理解してくれない」と言います。けれども、イエス様は、私たち一人一人の苦しみを理解できるだけではなく、考えていてくださるのです。

イエス様は私たちに、全てに勝る力を与えようと望んでおられます。これこそ、「平和のもと」「安全のもと」なのではないでしょうか。

この主イエス様に出会った人々はみな、次のように証しすることができます。

「私が罪の快樂に沈み、イエス様を拒んだ時でさえも、イエス様は私を愛してくださっていた。『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。(第一テモテ1:15)』というみことばは、私に勇気を与え、私が良心の呵責、不安と疑い、失望、落胆の中に置かれ、さらに墮落するか、或いは、死によって救われるか、という人生の危機に立った時も、イエス様が愛し続けていてくださったことを知り、私はイエス様の大いなる愛の前に降参したのです」と。パウロも、「私を愛し、私のためにご自身をお捨てになった、神の御子主イエス」と言えたのです。「かつて、どうすることもできず悩んでいた時でさえも、そのような私のことをイエス様は愛していてくださった。そして、私が自分の力で良くなろうと努力することを止めて、ありのままの姿で主のみもとに行ったとき、完全に打ち砕かれた私は主の愛を体験的に知ることができた」と、証しすることができるようになるのです。

私も、62年前にイエス様によって永遠のいのちを与えられ、今日までイエス様が私のことを愛していてくださるということを実体験できることは、主イエス様の恵みそのものです。

イエス様を知り、イエス様をもつことは、結局平安をもつことを意味しているのではないのでしょうか。私たちは悪魔によって試みられ、攻撃される時でも、イエス様が私たちを愛しておられ、イエス様が既に勝利を治めておられるということは、何という素晴らしい事実でしょうか。

悩んでいる人々に贈るみことばは、コリント第一の手紙10章のみことばではないかと思えます。多くの人たちは既に暗記しているでしょう。

コリント人への手紙・第一 10章13節

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

病気を与えるお方だけではなくて、同時に薬も、必ず効く薬も与えていてくださるお方です。

イエス様は、私たちが主のことを考える以前から、私たちに心配しておられました。

イエス様は、私たちが主のところに行く前に、私たちに来られていたのです。

イエス様は、今日も私たちに呼びかけておられます。

マタイの福音書 11章28節

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

と。これこそが素晴らしい呼びかけなのではないでしょうか。

私たちがまことの平和を持っているかどうかは、私たちが「主イエス様の流された血」に対して、いかなる態度を取るかにかかっています。聖書全体は、私たちに救いと解放のために「イエス様の血」が必要不可欠であると語っています。

先日、ある人の証しを読んでもらったのですが、いろいろなことを書いてありましたが、「イエス様の血」について一言も触れられていなかったのです。いったいどういうことなのでしょう。

「イエス様の流された血」こそが、イエス様の「救いが本物」であることの証拠であり、「イエス様の流された血」こそが、「罪の赦し」のための唯一の逃れ道だったのです。

旧約聖書の出エジプト記を見てみましょう。この12章の中に、それに対する実例を見出すことができます。主は、イスラエルの民を過ぎ越し、守るために、子羊の血をかもいと入口の二つの柱に塗るように命令されました。出エジプト記の12章から2、3節をお読みいたします。

出エジプト記 12章1節から7節

主は、エジプトの国でモーセとアロンに仰せられた。「この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ。イスラエルの全会衆に告げて言え。この月の十日に、おのおのその父祖の家ごとに、羊一頭を、すなわち、家族ごとに羊一頭を用意しなさい。もし家族が羊一頭の分より少ないなら、その人はその家の

すぐ隣の人と、人数に応じて一頭を取り、めいめいが食べる分量に応じて、その羊を分けなければならない。あなたがたの羊は傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。あなたがたはこの月の十四日までそれをよく見守る。そしてイスラエルの民の全集会は集まって、夕暮れにそれをほふり、その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と、かもいに、それをつける。」

と書いてあります。

#### 12節、13節

「その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人をはじめ、家畜に至るまで、エジプトの地のすべての初子を打ち、また、エジプトのすべての神々にさばきを下そう。わたしは主である。あなたがたのいる家々の血は、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない。」

#### 21節から23節

そこで、モーセはイスラエルの長老たちをみな呼び寄せて言った。「あなたがたの家族のために羊を、ためらうことなく、取り、過越のいけにえとしてほふりなさい。ヒソプの一束を取って、鉢の中の血に浸し、その鉢の中の血をかもいと二本の門柱につけなさい。朝まで、だれも家の戸口から外に出てはならない。主がエジプトを打つために行き巡られ、かもいと二本の門柱にある血をご覧になれば、主はその戸口を過ぎ越され、滅ぼす者があなたがたの家には行って、打つことがないようにされる。」

#### 28節から30節

こうしてイスラエル人は行って、行なった。主がモーセとアロンに命じられたとおりに行なった。真夜中になって、主はエジプトの地のすべての初子を、王座に着くパロの初子から、地下牢にいる捕虜の初子に至るまで、また、すべての家畜の初子をも打たれた。それで、その夜、パロやその家臣および全エジプトが起き上がった。そして、エジプトには激しい泣き叫びが起こった。それは死人のない家がなかったからである。

『こうしてイスラエル人は行って、行なった』。分かったからではなく、信じたからです。

主は、子羊の血をご覧になる時、イスラエルの民にわざわいを起こされませんでした。なぜなら、その血が、「救いと贖い」を意味していたからです。主が守られる手段は、「血」でした。「子羊の流された血」だったのです。民は、かもいと門柱に血を塗らなければならなかったのです。血を塗ることは、決して美的なことではありません。けれど、それこそ、「唯一の救いの道」でした。その血によって、イスラエルの民は守られ、覆われたのです。

「罪に対する勝利」「悪魔に対する勝利」は、どのようにしてなされるのでしょうか。

黙示録 12章 11節をお読みしたいと思います。

ヨハネの黙示録 12章 11節

「兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝った。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかった。」

「彼」とは、「悪魔」です。「小羊の血によって打ち勝つ」とあります。勝利の秘訣は、「イエス様の血」です。悪魔は、イエス様の血を最も忌み嫌うものです。なぜなら、罪人でさえも「主イエスの血」によって守られるとするなら、悪魔の仕業は全く不可抗力となるのです。ですから、悪魔は、私たちが「イエス様の血」について語ることを、あらゆる犠牲、方法を払っても妨げようとしているのです。

先日ある人が、「イエス様を信じています。みことばを食べています。素晴らしいけれど、ときどき恐ろしい夢を見るようになり、悪魔の夢を見ます。どうしましょうか」と質問しましたので、「すぐ起きて、イエス様の血について考え、血によって守られていることを感謝しなさい」と話しました。

つまり悪魔は、「もうキリストの血について別に考えなくてもいいだろう。沈黙したほうがいいだろう」。また或いは、「それは美的ではない。それについては言わないほうがいい」とそそのかすのです。また或る者には、「あまりにも聖なるものであるから黙ったほうがいいのではないか」と。しかし、罪の問題は「イエス様の流された血」によってのみ、解決されるのです。

言うまでもなく、「イエス様の捧げられた血」とは、「イエス様のいのち」そのものです。「黙ったほうがいい」。このような悪魔のささやきに負けた者は、悪魔の餌食になってしまいます。けれど、私たちは、「イエス様の血」について黙ることは許されません。誰も、「イエス様の血によってのみ」、悪魔に打ち勝つことができるということを知るべきです。

悪魔は私たちの「外」にあり、罪は私たちの「内」にあります。そして、私たちの内にある罪は、外にある悪魔と結びついているのです。誰も生まれたときから罪を持っています。つまり、「罪の性質」を持って生まれてきます。そしてこの「罪」は、主なる「神に対して逆らう意志」です。この「罪」は、人間が、「私はできる」とか、「私はしたい」とかいう、うわべだけの見せかけの形をとるのです。

そのようなことの中に、まさに罪の根を宿しているのです。すなわち、自己決定と自己支配です。誰も自分の「心にある罪」から、自分自身を解放することはできません。このように、自分でやろうとする試みでさえも罪なのです。なぜなら、主なる神に拠り頼まず、主から離れているからです。心の内にある罪を自分の力で解決しようとし、多くの「宗教」と「世界観」が、ますます自己決定、自己支配の深みへと陥らせるようにするのです。しかし誰も自分の力で自分を解放することはできません。イエス様だけが、「罪に対する勝利

者」であられ、私たちの内に住む罪に対する勝利者でもあられます。

私たちが庭の雑草を取って捨てるように、イエス様は私たちから心の中にある罪を取って捨ててくださればいいのですが、実際はそれができません。罪は、私たちの肉体が存在する限り、私たちの内に存在し続けます。私たちが死んで肉体が減じた時、初めて私たちは罪から解放されるのです。

人間は、虫歯を抜くこともできれば、手足の悪い部分を切断することもできます。けれど、もしも中枢神経が悪くなった場合、それを取り出すことは生命を失うことを意味するのです。罪は、このような神経と同じように全身に入り込んでいるのです。血液が全身を循環するのと同様に、罪も全身に染み込んでいるのです。ですから、罪は「死」によらなければ消滅しません。主は私たちを証し人として用いたいと思っておられるので、この世に生かしておいてくださるのです。

イエス様は、どのようにして私たちの「内にある罪」の問題を解決なさるのでしょうか。これこそ多くの人々が苦闘している問題です。しかしこの問題は、もうすでにイエス様によって解決されているのです。コリント第二の手紙5章21節を読むと、次のように書き記されています。

コリント人への手紙・第二 5章21節

**神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。**

父なる神は御子イエス様を「罪そのもの」とされたのです。すなわち、神の「ひとり子」のようにではなく、あたかも「罪そのもの」であるかのように取り扱われました。そしてイエス様は、ただ神のみこころだけを行なわれたにもかかわらず、あたかも主なる神に最も敵対する者であるかのように罰せられました。

主なる神は、罪に対して死の判決をくださったのです。そしてそれは御子イエス様に向けられました。イエス様のからだに裂かれたとき、罪の力も消滅しました。主イエス様の流された血は、肉の中にある罪の力が消滅した証明でした。

この事実は、私たちの人生にとって最も決定的な意味を持っております。私たちの内にある罪は、イエス様の犠牲によってその力が消滅したのです。すなわち、イエス様の流された血は、私たちの内にある罪に対する「完全な勝利」を意味しているのです。イエス様を受け入れる者は、罪に対するイエス様の勝利にあずかっているのです。これこそ、私たちが罪から解放する素晴らしい福音ではないでしょうか。イエス様の血は、私たちの内にある罪を負うてくださるのです。

街路は一般的にアスファルトで舗装されています。アスファルトの下には雑草などもあ

ったはずなのですが、アスファルトが厚く地面を覆っている場合は雑草が生え出る余地はありません。けれど、アスファルトが駄目になって隙間ができたりすると、そこから雑草が芽を出すでしょう。これと同じように、イエス様は私たちの罪の問題を解決してくださいました。すなわち、イエス様の血が、私たちの罪を覆ってくださったのです。そのため、罪の力は消滅し、芽を出すことができなくなったのです。

しかし、イエス様の血が私たちの罪を完全に覆ってくださったにもかかわらず、私たちが告白しない罪を隠していたり、イエス様の前にすべてを捧げようとせず、完全に明け渡さない場合には、そのところから再び罪が芽を出してくるのです。イエス様の血による守りこそ、私たちの内にある罪に対する完全な勝利の秘訣です。

ローマ人への手紙に、次のように書かれています。

ローマ人への手紙 6章14節

というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。

とあります。「恵みのもとにある」ということは、イエス様の血の働きのもとにある、ということの意味しています。イエス様の血による罪に対する完全な勝利は、私たち罪人にとって大いなる喜ばしい福音そのものです。

ペテロは、この血の尊さをほめたたえたのです。

ペテロの手紙・第一 1章18節、19節

ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。

「贖い出されたのは、イエス様の血によったのである」。

ヨハネ伝8章36節を読むと、イエス様は次のように言われました。

ヨハネの福音書 8章36節

「もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」

とあります。聖書は悪魔からの解放、罪の束縛からの解放を告げ知らせています。

多くの人々は、「私は自由で何のものにも束縛されていない」と言うかもしれませんが、それは本当でしょうか。イエス様を体験的に知っていなければ、全て人間は罪の奴隷であり、自由な者ではありません。イエス様だけが、あらゆる罪の束縛から解放し贖い出してくださいます。

使徒行伝 2 6 章 1 8 節を読むと、使徒たちに与えられている使命とはどういうものであるか、分かります。

使徒の働き 2 6 章 1 8 節

『それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあつて御国を受け継がせるためである。』

とあります。したがって、私たちの支配者は、イエス様であるか、悪魔であるかのどちらかです。

エリヤは、当時イスラエルの民に向かって叫んだのです。

列王記・第一 1 8 章 2 1 節

エリヤはみなの前に進み出て言った。「あなたがたは、いつまでどっちつかずによるめいているのか。もし、主が神であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え。」

主は決して強制なさいません。エリヤもイスラエルの民を強制するつもりではありませんでした。しかし、「決定しなさい」と。私たちの支配者がどちらであるかによって、私たちは永遠の滅びに行くか、永遠のいのちに行くかに決定されるのです。どうか、罪と悪魔に対して完全な勝利をおさめてくださったイエス様にすべてを明け渡してください。私たちは、悪魔の力から離れて、主イエス様のみもとに来なければなりません。

最後に、今述べたこの事がいかにして実現されるのかについて考えたいと思います。

まず第一に、主の前に自分が弱くてどうしようもない者であることを言い表わし、告白し、罪から離れなさい。

マタイによる福音書で一文章だけですが、イエス様は証しなさいました。

マタイの福音書 9 章 1 3 節後半

「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

当時のいわゆる立派な生活をおくった聖書学者たちは、「あのキリストはけしからん。どうしようもない人々、いわゆる罪人と一緒に交わっている。罪人を大切にすると。」

イエス様は確かに聖書学者と一つになろうと思ってもできなかったのです。しかし例外があったのです。ニコデモです。けれども、多数の聖書学者たちは、へりくだろうとしませませんでした。正直になろうとしなかったため、イエス様は、はっきり「わたしは罪人のために来たのです。罪人だけしか招くつもりはありません。ほかの人々はどうせ来ないから

です」とおっしゃったのです。

ルカ伝 1 5 章。全部よく知られている箇所ですが、1 5 章の 4 節から 6 節までお読みいたします。

ルカの福音書 1 5 章 4 節から 6 節

「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。見つけたら、大喜びでその羊をかついで、帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。」

ルカの福音書 1 5 章 2 1 節

「息子は言った。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』」

(資格がありませんでしたが、息子は息子です。)

この救いにあずかった、この恵みを自分のものにするようになったパウロは、告白しました。テモテ第一の手紙 1 章 1 5 節です。

テモテへの手紙・第一 1 章 1 5 節

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

「最もひどいのは私です」と。

イザヤ書の中でも、同じような呼びかけが書き記されています。

イザヤ書 5 5 章 7 節

悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。

主は罪人たちを呼んでおられ、赦したくて赦したくてしかたがないお方なのです。

私たちが悪魔の力から離れることは、いかにして実現されるのでしょうか。

今話しましたように、

まず第一に、主の御前に小さくなること。自分のことを言い表わすこと。告白し、悔い改め、罪から離れることによってです。

第二番目の答えは、イエス様を自分の保証人、救い主、また大祭司として受け入れることによってです。

イザヤは書きました。

イザヤ書 53章6節

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分勝手な道に向かって行った。  
しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

「私たちはみな」とは、例外なくということです。「彼」とは、「十字架につけられた主イエス様」です。

ペテロはこの箇所を引用し、この箇所について考えながら書いたのです。

ペテロの手紙・第一 2章24節

自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

また、ヨハネは

ヨハネの福音書 1章12節

しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

「イエス様を理解した人々」ではありません。「受け入れた人々」です。

「私は神の子です」と言える人は、素晴らしいのではないのでしょうか。

この間、ドイツでいろいろな人たちが一緒に、ある古い古い街を見学したのです。シュタイナマライン(?)という街です。いろいろな言葉が書かれてあります。ある立派な家の外側には何が書かれていたかといいますと、「この家は私のものです。しかし、私のものではありません。人生は短かすぎるからです」と。まあだいたいそういうものです。けれど私たちは、「何でもできるお方は私たちのものです」と、誇りをもって言えるのではないのでしょうか。ダビデのように、「主は私のもの。私の羊飼いです」と。羊そのものはもちろん駄目で、どうしようもないものです。けれど、イエス様は昨日も今日も、いつまでも変わることはない良い牧者として導いていてくださるお方です。

大祭司のつとめとは、結局そういうものでもあるのではないのでしょうか。

イエス様は、私たちのわがままのために死に渡され、私たちが義と認められるためによみがえられたのです。

私たちが悪魔の力から離れるということは、いかにして実現されるのでしょうか。

それは今話しましたように、

- ・まず、ひれ伏すこと。自分の無力さを言い表わすこと。そして、主に頼ること。

- ・二番目、イエス様を自分の保証人として、救い主として、大祭司として受け取ることです。
- ・更にもう一つ。主がみことばを通して言われることを素直に信じることです。分かること、理解することではありません。書かれているから信じます。この断固たる態度をとることが要求されています。

ヨハネの福音書 6章37節後半

「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」

これこそ「安全」ではないでしょうか。

ヨハネの福音書 5章24節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、私を遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」

もう一箇所、ローマ書8章からお読みいたします。

ローマ人への手紙 8章1節

…キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

38節、39節

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

私たちにとってこれこそ、最高の宝物なのではないでしょうか。

了